

料で生活は安定し、私の戦後は終わった。

五 おわりに

その後、日本は平和の国是の下に終戦直後には想像もできなかったほどの目覚ましい発展を遂げて経済大国と呼ばれるようになった。引き揚げてから五十四年、この豊かで安定した祖国での生活を振り返って平和の尊さを子子孫孫に伝え、この引揚げ記録のような苦勞を再び経験する事がないように切に祈りたい。

本文を終わるに当たり、引揚げの際にお世話になった多くの方々に感謝すると共に、帰国の夢を果たせず途中で亡くなった方々に心から哀悼の意を表します。

朔州から決死の脱出

三十八度線を突破して

京都府 温 品 廣 助

一 生い立ち

私の父は明治三十一（一八九八）年生まれで、大正

時代、旧制高等商業学校を卒業と同時に、当時関西を中心に活動する糸偏系商社に入社し、間もなく上海支店へ転勤した。大正末期に母と結婚後も引き続き同支店に勤務した。兄も上海生まれ、私も昭和五（一九三〇）年、上海市東照里で生まれて、幼稚園の頃までそこに住んでいた。幼稚園は知恩院幼稚園といって、上海海軍陸戦隊本部のすぐ近くにあった。幼稚園を卒業した時に、施高塔路、千愛里に引越して、北四川路の第一北部小学校に入学した。三年に進級するとき、新設の第五小学校に編入されることになった。昭和十八年に小学校を卒業して四月に上海中学校に入学した。千愛里では、父母と兄の家族四人と、住み込みのお手伝いが一人の五人住まいであった。衣食住、何の自由もなく、大東亜戦争へ突入とともに、軍国少年の一員として節度ある楽しい時期を過ごすことができた。

二 北朝鮮朔州で終戦

大東亜戦争が始まったのは昭和十六年十二月八日、私が第五小学校五年生の時だった。この日、日本軍のハワイ真珠湾奇襲攻撃にあわせ、上海では支那方面艦

隊が黄浦江の英砲艦ベトルル号を撃沈した。ちょうど朝五時頃であったと思うが、ドーンという砲音で目が覚めたのを覚えている。

大東亜戦争も初期はともかく、昭和十七年六月のミッドウェー海戦で日本海軍は敗北、さらに同年八月、米軍ガダルカナル島に上陸、日本軍の劣勢が決定になった。昭和十八年六月、中学生以上に對する学徒動員令が施行、同年十月には学生の徴兵年齢一年引き下げが決定された。また昭和十九年七月、サイパン島陥落、同年十月、米軍レイテ島上陸、比島沖海戦に神風特攻隊初出撃、十一月、B 29の東京初空襲があった。このような状況になって、上海にも米軍が上陸してくるのではという怪しげな話が乱れ飛ぶようになり、上海から内地へ、あるいは別の安全と思われるところを探して疎開する家族が始め、何となく我々も浮き足立つ思いであった。空襲も日増しに多くなつて、近くの工場が爆撃される爆裂音も聞こえるようになった。伯父が住んでいる北朝鮮の朔州ソクジュは今のところ空襲もないし、内地に帰るよりも安全だろうと父が

判断して、私と母が世話になることになった。父は上海の会社に残り、上海の東亜同文書院大学の一年生であった兄は、学徒出陣で南京の部隊に入隊することになった。そうしてこの時から家族はばらばらになった。

私と母が伯父を頼り朔州に向かつて出発したのは、昭和二十年二月十九日、中学二年の時であった。長らく住み慣れた施高塔路、千愛里二十七号の我が家の門前で、父と中国人のお手伝いとも別れを告げ、車で埠頭に向かった。客船は二千トンほどの小さい船だが、船室には内地に帰る除隊兵士や、会社の家族らでいっぱいだったが、お互い郷土の話に花を咲かせてにぎやかであった。船は敵機の攻撃を避けるため、完全な灯火管制をして夜半に出帆して、黄海の海岸からあまり離れないで北へ北へと進んだ。真っ黒な海で、敵機の他に海上にばらまかれた機雷を避けて運航するために、船長はじめ船員の気苦労は大変なものだった。一日目の朝には青島チンギョウ、二日目の昼間は天津テンシンの港に待避、停泊したので、出帆してから丸三日かかって大連ダイレンに到

着した。二月の大連はまだ寒かった。父から伯父や会社の支店に連絡がとってあったので、出迎えに来てくれた伯父に会って、ひとまず奉天（瀋陽）のホテルに落ち着くことができた。翌日、伯父に連れられて、列車で北朝鮮の新義州（シンギョウジュ）に向かい、さらに車で約二時間、鴨緑江沿いに走って、朔州の伯父の家に着いた。

学校は新義州中学三年に転入した。四月から新義州工業学校に在学中のいとこと一緒に、古びた下宿屋に住むことになった。下宿の家主は、千葉県出身の元小学校校長の永嶋さんであった。ここの学校でも学徒動員があつて、授業は全く行われず、飛行場を作るためにモッコで土を運ぶ作業が毎日続いた。労働は激しいのに、下宿での食事はすいとんとトウモロコシの粉で作った朝鮮パンが一個だけで、米の飯などは全く食べられなかった。この名ばかりのパンには、トウモロコシを石臼で粉にする時に石粒が混じるのか、噛むとジャリジャリしてまともに食べられる代物ではなかった。また、下宿の建物も傷み放題で、壁は穴だらけ、雨漏りも所かまわずという有様、その上住人が掃除も

しないときているので部屋はほこりまみれ。公務員一人と学生三人の計四人が住んでいた。私は、週末には伯父の家に帰った。虱に刺されてさんざんな目に遭ったのもこの頃である。工業学校に通っていたところは海軍予科練を志願し、採用されて五月に内地に向かつて出発して行つた。

夏休みで朔州の伯父の家に帰っていた昭和二十年八月十五日、天皇陛下の玉音放送があるというのでラジオに耳をつけるようにして聞いていたが、雑音がひどくよく聞き取れなかった。家の周りで騒いでいた現地民たちの言動から放送は敗戦を報じるものであったと分かった。

三 初回脱出の失敗

玉音放送のあつた八月一五日を境に、現地朝鮮人たちの日本人に対する態度と目つきが急に変わり、陰悪な雰囲気になってきた。現地民の中には、家も土地も我々のものだ、即刻明け渡して出て行けと言ひ出す者もいた。この時、伯父の家には、伯父と次男と私の母と私の四人が住んでいた。伯母はガンを患っていた

が、戦争中のことで行き届いた治療もできず、終戦の日に息を引き取った。

現地人の明け渡し要求が強硬になるなど、周りは騒がしくなってきたが、内地からの手紙など届くわけがないし、頼みのラジオもピーピー雑音を発するだけで日本の様子などうかがい知れなかった。また、内地に引き揚げるにしても何をどうしたら良いのか情報は何一つ入ってこず、朔州という孤島に閉じこめられてしまったような気がした。とりあえず、有志が「朔州日本人世話会」を結成した。伯父はその会の世話人になったので、毎日会に出席するのが日課になったが、肝心の情報が全く入らず、何をどうしたら良いのか見当もつかない、つらい毎日が続いた。現地民から入ってくる話は、日本軍が武装解除されているとか、朔州の国鉄駅に今列車が止まっているから早く乗った方が良いとか、当てにならない話ばかりで、「何日、何時に、どこ行きの列車が朔州を出る」という具体的な情報はどこからも入ってこなかった。我々は、いらいりするだけであった。伯父が世話会で持ち出した脱出案

は、「整然とした引揚げはむづかしい、夜間脱出しよう」というものであった。この脱出を成功させる条件として

一、二十人以下の小グループを編成する。

二、リーダーは朝鮮語を話せる人とする。

三、持ち物は家族ごとに鍋、やかんと各自の食器。

食料品は最低限トウモロコシの粉と塩。衣類は当座のものだけに限る。

四、グループごと時間差をつけて出発し、移動は住民の寝静まっている夜間、天気の良い時だけとする。

の四項を提案して賛成を得た。我々のグループ構成は、赤ん坊から十四、五歳の子供と五十を過ぎた男女合計十八人であった。二十歳以上、四十歳代の働き盛りの男はほとんど連行されてしまっていたからである。最初の目標、水豊ダムに向かって真夜中の十二時に出発した。きれいな月が出ていた。水豊ダムは、日本が当時の最高の技術を集めて完成させた東洋一のダムであった。私は上海から履いていた牛革製の編み上

げを大事に使っていたが、終戦の日のどさくさに盗まれてしまったために、かなり傷んだズックの運動靴を履いて歩いた。水豊ダムまでは約八キロメートルの道のりだが、普段歩き慣れていないので足にできたマメが痛んで困った。我慢して歩いているうちに、国鉄駅の構内に入った。そこには思いがけなく貨物列車が停車していた。どこへ行く列車なのか全然分からないまま、リーダーの命令で貨車に乗った。貨物列車はしばらくして発車したが、どこに行くのかは全く分からない。無蓋貨車なので、夏とはいえず少々寒いくらいである。夜明けに着いたのは定州という駅であった。しばらくして、貨物列車は我々が乗った貨車を切り離して出発してしまった。リーダーが駅にいたソ連兵と交渉したが話はうまく進まず、何のことはない、別の機関車に引っ張られて水豊ダムの駅に逆戻りさせられてしまった。せっかくの努力は水泡に帰して、また、一切情報が入らない孤立した生活に戻ってしまった。住まいは何とか交渉して元の家に入れてもらったが、食料はまともな物はなく量も乏しかった。幸い山のふもと

から野原にかけて食べられる野草がたくさん採れたので、すいとんに混ぜて食べた。住まいの裏手は鴨綠江で、川にかかっている鉄橋を渡って物を売りに来る満人から、サツマイモを買って空腹を満たすのが楽しみであった。

九月を過ぎた北朝鮮の夜はかなり寒い。冬は零下十度から十五度まで下がり、濡れたタオルは屋外に出た途端にかちんかちんに凍り付いてしまう。部屋の中でも、オンドルに火を入れなければ寒くてとてもいられない。相変わらず日本内地との連絡方法はなく、情報は一切入ってこない。帰国の計画など立てようもなかった。借りている家もすぐ明け渡せと催促があり、長くはいられそうもなかった。日本人世話会としても現地の人たちと対立するわけには行かず、個々に借りていた家を出て、今は使っていない日本人小学校の校舎に移ることになった。戦いに敗れた日本人の共同生活の始まりであった。

四 再度脱出を決意

合宿、共同生活を始めてからも、相変わらず日本人

が内地に引き揚げたという話は全く伝わってこなかった。伯父は、毎日日本人世話会に行つて情報収集に努めていたが、確かな情報がないまま単調な毎日が続くだけであった。住宅の周囲にいる朝鮮人たちが、冷ややかな目で私たちをちらっと見てはひそひそ話をするのが目立つようになった。何とも重苦しい雰囲気で、戦に負けた惨めさを痛いほど感じた。その頃から、大型トラックに乗つたソ連兵が、大きな声で陽気に歌いながら通り過ぎるのを見かけるようになった。そんな状況が繰り返されるようになって、誰からともなくソ連兵が若い女性を全部連れ去るといふ噂が流れ出した。心配した親たちの勧めもあつて、若い女性たちは髪を切つて男装したり、住まいとは別の場所に身を隠したり、各自でいろいろ工夫して身の安全を図つた。朝鮮人から聞いた話では、近くに駐留していた日本兵が武装解除されてソ連軍に連行されたとか、満州の奉天で暴動が起こり、ソ連兵が発砲して多くの日本人に死傷者が出たということであつた。また、東洋一の水豊ダムに設置したモーターもソ連兵が外して持ち去つ

たという話が、別の方から伝わつてきた。南朝鮮や上海のように米軍が駐留している地域では、手早く家財を内地に送つたりヤミ船を利用して、さほど苦しい経験もせずに引き揚げるのができたという話が伝わつてきた。北朝鮮や満州の民間人が、なぜこのような目に遭わなければならないのかと思わずにいられなかつた。ソ連の支配下におかれた以上、仕方のないこととあきらめるしかなかつた。

北朝鮮の冬は寒い。キーンと耳がつんぬけるような寒気、鴨緑江も満州側まで全面凍りついてしまう。帰国できる当てもなくこのまま北朝鮮でもうひと冬越すしかなかつた。春からずっと一緒に暮らしてきた者たちが、お互い助け合つて何とかこの厳しい冬をしのいで行かなければと思つた。しかし、いつ帰れるか何の見通しもつかない状況が続いていたので、ひよっとするとこのまま日本に帰れないのではないかという不安が胸をよぎり、郷土の風景を思い浮かべては望郷の念がつのるばかりであつた。

母は貧血気味のため上海にいたころから体調は良く

なかったが、このような不安定な環境が病人の体に良いはずはなく、薬も住まいの近くには良い病院がなかったので、遠くにあるキリスト教病院までもらいに行かなければならなかった。皆この状態のままではいけないと思っていた。この状況から抜け出すためには、やはり少人数のグループ単位でここを脱出、南下して三十八度線を突破するしかない。これが今考えられる最良の策だという考えが、世話会の中で固まっていると伯父から伝えられた。一回目の脱出の時と同じように、とにかく必要最小限の身の回りの物と、食糧としてトウモロコシの粉と塩などを用意すること、老人と女子供の集団だから、まとまって行動しなければならぬという注意事項が伝えられ、出発日が煮詰まってきたのは一回目の脱出の日からほぼ一年経った、昭和二十一年の夏であった。皆の顔にはうまく行くのかという不安と、うまく行けば日本内地に帰れるという希望とが入り交じっていた。

五 決死の脱出と三十八度線突破

私のグループは、八十歳になるおばあさんを連れて

朝倉老夫妻、二十歳の娘さんと一緒の五十代の米倉夫妻、同じ五十歳代の菊地夫妻、ご主人がシベリアに連行され、五歳の男の子を頭に三歳、二歳の三人のお子さん連れられた内田夫人。他に十五、六歳ぐらいの兄妹と伯父と伯父の次男と私と私の母の四人、合計十八人であった。伯父は脱出のタイミングを計っていた。初回の二の舞はできない。まず、ソ連兵のいる町中は避ける必要があったから農村地帯と山道を通るしかない。普段通ったことのない道である。幸い伯父は言葉ができたので、道を間違えう心配はなかった。だが伯父はグループの責任者として、全員を無事に日本まで連れて帰らなければならないのだ。その責任の重さを考えるとどんなに気が重いだらうと思った。

いよいよ出発の日が来た。グループは、月の明るい夜を選んで水豊ダムに向かって歩き始めた。水豊駅の構内に入ったところ、前回のよう、いつでも動けるように蒸気を噴いている機関車が、貨車を連結して停車していた。全員貨車に乗り込んだ。前回の轍を踏まないために、定州まで行かないうちに列車を降りるこ

とに決めた。深夜、貨物列車は西へ向かって走りはじめた。果たして列車は我々に都合良い場所で停車するだろうかと不安であったが、三、四時間走った頃、神の助けか定州近くの畑の中で停車した。「早く降りろ」と伯父が声をかけた。全員お互い助け合いながら、次々に貨車から降りた。駅は見えず、周囲一帯が畑であった。いよいよ行進が始まった。大変なのは、老人を抱えた朝倉さん夫妻と小さな子供三人を運れた内田さんだ。だが今から心配していても仕方がない。とにかく歩くだけだ。牛車でも雇えれば良いと考えたが、夜中のことでもありすぐ都合がつくはずがない。しばらく歩いてから野宿することにした。野宿といっても天幕や毛布があるわけはなく、着の身着のまま横になるだけである。食事はトウモロコシの粉を川の水で溶いたもの。味付けは塩。飲み水も川の水。しかし誰も文句を言う人はいない。貧しい食事を済ませたら、思ひ思いに休む。夜空にはきらきらと星が輝いていた。夜露があたると、九月というのにちょっと寒い。少しうとうととしているうちに夜が明けてきて、農民も

ぼつぼつ野良仕事を始めるようになった。伯父は、通りかかった農夫に牛車を貸してもらえないかと交渉を始めたが、このあたりの農家では初めてのことではないらしく、話は割合簡単にまとまった。隣村まで貸してくれることになった。老人を運れた朝倉さんと、三人の小さな子供を運れた内田さんは、これで一息つくことができた。途中、小さな川は靴を脱いで素足で渡った。遅れる人が出ると、元気な者はあまり離れないように、道路脇でその人たちが追いつくのを待つということを繰り返した。一日中歩いて日が暮れると、その場所で夕食と野宿である。こんな毎日が一週間も続いた。栄養不足と疲労がたまって、皆黙り込んでしまふ。こうなると、誰も人のことまで考える余裕がなくなり自分のことだけ、せいぜい自分の家族のことしか考えられなくなってしまった。朝倉さんのおばあさんは、栄養失調と疲労が重なって体力の消耗が激しく、ついに息を引き取った。一寸先がどうなるかわからない引揚げの途中、手厚く葬ることもできず申し訳ないと思っただが、道端に埋葬、お別れを告げて旅を続

けた。小さい子供三人の母、内田さんは二歳の子を背負い、疲れたと泣きわめく二人の子供を叱りながら、必死に歩き続けた。私たちは、牛車が来ないかと願いながらひたすら歩いた。運良く我々に追いついた農民の牛車があると頼み込んで乗せてもらった。たまに、我々より先に出一団に追いつくことがあったが、お互い疲れ切っているせいか声をかけることもなかった。

私は出発して十四、五日目くらいのときに高熱に悩まされた。熱が出る前に歯がガチガチ鳴って、体全体に震えがくる。そんな状態が一日おきに起こる。マリアだと分かった。母も、私が発病して二日ほどたつて同じマリアにかかったが、私より症状が軽くてほっとした。雨の日に野宿する時、他の人は農家の軒下で寝たが、私と母はわらをしまっていた小屋で休んだのでマリア蚊にやられたのだと思う。しかし、薬がないので我慢して歩くしかない。病気だからといって、グループから離れるわけにはいかない。一年間思い詰めていた望郷の念は捨てきれない。母には、もう

少しもう少しと励ますことで、自分を奮い立たせていた。何が何でも本土の土を踏まなくてはという気持ちだけで歩き続けていた。途中、野良仕事で重いものを背負うために使う「チゲ」という道具を持った男が近寄ってきて、老人や子供を運んでやると言ったが、この連中は金をむしり取るのが目的の追いはぎなのである。こういう人がいるということは出発前のミーティングで聞かされていたので、騙されず事なきを得た。

三十八度線はもうすぐだと、一緒になった先発団の人の話を信じて頑張って歩いた。連日の行進に疲労困憊しながらも、日本に帰って家族に再会できることを思っただけか、グループの人たちの顔には明るさが見えてきた。朔州を出てから二十日ほど経つたろうか、小高い峠で小休止した。この峠を越えれば三十八度線まで六、七キロメートルという話が口づてに伝わってきた。三十八度線さえ越えれば米軍が統治する南朝鮮に入るのだ、と考えたただけではっとする思いであった。我々の他にも二、三組のグループがいた。そこへ保安隊員と称して、現地民であろう青年が数人やってき

た。その中の一人が右手に日本刀を持ち、左手に三八式銃を持って「これから取り調べを行う」と、近くの寺の庭に連行された。そして衣類、時計、地図など持ち物を全部置けと言う。私は身に着けていたベストと、英和コンサイスを取られた。「北朝鮮の地にあるものはすべて北朝鮮のもの」という理屈である。金は取られなかったが、追いはぎに違いないと思った。かれこれ三十分ほどであったろうか、めぼしい物を取るだけ取って彼らは去って行った。

先に到着していたグループから順次三十八度線目指して出発した。三、四時間歩いたあたりで前方に低い丘が見えてきた。農民に道を聞きながら、両側に背丈ほどの草が生い茂っている細い道を、ソ連兵に見つからぬよう全員必死の思いで小走りに進んだ。リーダーが、たった今三十八度線を越えたと叫んだのを聞いたとき、満州や北朝鮮から何万という引揚難民が必死になつて通り抜けたであろう、私たちも夢にまで見た三十八度線を自分の足で越えることができた、これで安心と思ひ、一瞬拍子抜けしたような気分であつた。そ

してさらに二時間ほど歩いた時に、前方から「日本人世話会」と記した腕章をつけた二、三人の人が「ご苦勞様、お帰りなさい。私たちは三十八度線越えの引揚者の皆様をお世話している者です」と挨拶され、開城にある引揚難民テント村へと案内してくれた。あちらこちらに警備しているであろう米軍のMP（憲兵）を見て、心の底から安心できて嬉しかった。

六 テント村から釜山へ

開城の街に入ると、米軍の大型トラックが待機していた。乗車して四、五十分走った丘の中腹に、いくつもテントが立っているのが見えた。ここが満州や北朝鮮から三十八度線を越えて南下した、多くの日本人引揚者を收容する米軍管理のテント村であつた。入り口にもMPが銃を持って立っていた。一張りのテントに百人入れたが、これがいくつあつたのか数え切れなかつた。まさに大テント村であつた。我々のグループは、昨日出発、帰国して空になつてテントに入るこゝろになつた。入り口には、白衣を着た検疫官が数人、消毒の準備をして待っていた。これから一週間、

健康診断をして一人でも法定伝染病患者が出たグループは、帰国を延期されるという説明を受けてから、一人一人頭のとっぺんから足の先までDDTを散布された。消毒を済ませた者から順次テントに入って行った。通路の両側に簡易ベッドがあり、その上に毛布が置いてあった。やっと安心して疲れた体を横にすることができた。しばらくして米軍用の缶詰や乾パン、飲み物などが配られたが、栄養失調のうえに疲労が重なって食欲もなかった。無理に食べても吸収する力すらなかった。軟らかいものからだんだん胃腸をならして、体力の回復を待つしかない。まず水を飲むことから始めた。空になった缶詰の缶に水をくむために、二十メートルほど離れた給水所まで行かなければならぬ。ちょっとした坂道があがるのが大変だった。痩せて果てて骸骨のような体で、這うようにして水を汲みに行ったことを覚えていて。ベッドでごろごろしているだけだったが、一週間は意外に早く過ぎた。幸い我々のグループからは法定伝染病患者が出なかったため、規定の一週間で引揚船の待つ釜山へ出発することが決

まった。野宿しながらの脱出行中は笑みも出なかったグループの仲間も、一週間の休養がとれて精神的にも解放され、顔には嬉しさがあふれていた。別のグループの中には、奉天での暴動でシャツを引き裂かれ腕に血痕がついたままの青年たちもいた。そんな人たちとも「お国はどちらですか」「○○です」といった会話が交わされる、和やかな雰囲気があふれていた。

全員が米軍の大型トラックに乗せられ開城駅に送られた。駅に待機していたのは有蓋車だったので、ひどく優遇されたような気分だった。われわれを乗せた貨物列車は、目的地の釜山港目指して静かに走り出し、釜山港駅に着いたのはもうあたりが暗くなり始めた頃であった。釜山港駅のすぐそばの埠頭には、米軍の上陸用舟艇を改造した船が係留されていた。われわれ引揚者は順次指示に従って船に乗り込んだ。そんな最中にも、埠頭で小さな子供が力尽きて死んだという、暗くやりきれない話が伝わってきた。船の後部でまたDDTの散布と検疫を受け、終わった者から船底へと階段を下りた。各自の寝る場所が決まると、グループご

とに毛布が支給され、班長から軍隊用語で「飯上げ」という食事の配分方法や、時刻について説明があった。私はマリアの熱と震えが襲ってきたので寝転がっているうちに、これでやっと日本に帰れるという安心感も手伝って、すっかり寝込んでしまった。いつ出帆したのか分からなかったが、目が覚めた時に聞こえた単調なエンジンの音が騒がしく、また頼もしく思えた。

七 博多港箱崎に上陸

船は玄界灘の荒波にもまれながら進んでいた。明日博多港に入港するというアナウンスを聞いて、気持ちはずでに小学生時代に一度行ったことのある郷里の山口県防府に飛んでいたが、なかなか元気も食欲も戻らず、ただおかゆをすするだけであった。しかし、元気な人たちは食事の配分量が不公平だと、恥も外聞もなく喧嘩を始める始末であった。私も何とか食べて元気を取り戻したいと思っただがどうにもならず、寝たままじっと船倉の天井を見つめていた。夜が明けかけたのであろう、甲板に上る階段のあたりがかすかに明るく

なってきた頃、ガタンガタン、ガラガラとアンカーを下ろす音と、船員たちの荒々しい指図の音が聞こえてきた。無事入港だ。やっと夢にまで見た日本に着いたのだ。押さえようのない感激と喜びが、胸に込み上げてきた。熱も下がり気分も良くなっていたので、甲板に駆け上がった。遠くに博多の山の緑滴る木々が見えた。私は、自分の新しい青春を見たように新鮮な感動を覚えた。この感動は十五歳という多感な年頃のせいかな、あるいは敗戦と引揚げの苦労を経てやっと平和にたどり着いたせいかな、今でも新鮮なものとして記憶に残っている。船が停泊している場所は博多港外で、陸地まではかなり離れていて、ここで一週間、検疫のために待機することになった。体の調子がますますの時は、昼夜に関係なく甲板に上がり、遠く博多の街を眺めて上陸の日を待った。もう十月、秋である。昼間、甲板から見える日本の山々の緑は美しい。北朝鮮では見られない緑である。私はじっと見入っていた。夜は夜、街の明かりが点々として美しい夜景であった。いずれも平和な日本の第一印象として心に残っている。

検疫待機は結局十日かかったが、私たちにはひと月にも思われた。いよいよ明日上陸と決まった夜は、嬉しさで一睡もできなかった。

八 郷里へ

やせ細った体にむち打って、元気なふりをして上陸し博多の土を踏んだのは昭和二十一年十月二十三日であった。街を歩いている若い女性たちが美しい着物を着て、口紅をつけ我々の前を通り過ぎて行く。今まで見ていた朝鮮や、引揚者たちの身なりと比べてあまりの美しさにびっくりした。父が勤めていた会社の福岡支店に立ち寄り、郷里防府の家に私達の列車到着時刻を電話連絡してもらった。門司行きの列車に乗ると、福岡の高校生が数人いて「引揚者のみなさん、本当にご苦労様でした」と声をかけられたのは嬉しかった。隣の席の人とは、「お国はどこらですか」などと会話が弾んだ。門司港から関門海峡を渡って下関に着き、ここで一緒に引き揚げてきたみなさんと「お元気でね」と挨拶を交わして別れた。

私たち四人は下関から山陽本線の列車に乗った。昭

和二十一年五月に上海から引き揚げていた父と兄といとこが駅まで迎えに来ていた。顔を合わせた家族の第一声は「生きていて良かった」。時に昭和二十一年十月二十四日であった。

九 引揚げ後の生活

私は栄養失調とマラリアの治療に一年あまりかかった。マラリアの治療にはキニーネが有効であった。街医者に往診してもらったのであるが、キニーネを何本注射したか覚えていない。一年後、もう良くなったと言われ中学校に入学したが、直りきっていなかったと見えて、雨に濡れたりすると再発したマラリアのために学校を休まなければならなかった。こんな状態であったから、大学を卒業するまでに丸二年のプランクを作ってしまった。しかし今振り返ってみると、長い人生の間にやむを得ない二年や三年のプランクが、マインスどころかその数倍のプラスになっていたと思う。

大学を卒業したのが昭和三十一年、ちょうど就職難の時代であった。幸い私は縁あって大阪の商社に入社

できた。同期入社は六十人であった。社会では三種の神器と称して、「テレビ・冷蔵庫・掃除機」がもてはやされはじめ、住宅公団がマンションをつくり、街にはスーパーが出現し、大量生産・大量消費の時代へ入っていった。いろいろ変化はあったが、高度成長期を経て低成長に落ち込み、すべて泡と消えてしまった。こんな変化の異常事態を体験して、平成二年の末をもって退職した。会社人間という言葉が流行った時代を駆け抜けたように思う。

二十世紀をざっと振り返ってみると、一九〇〇年は明治三十三年にあたり、明治時代が十一年間、大正時代が十四年、昭和が六十三年、平成が十二年。この間、さまざまな事件、戦争などの経験を経て、二十世紀も終わろうとしている。昭和元年から、終戦の昭和二十年の間に生まれた、いわゆる戦中派と呼ばれながら青春を送ったことが良かったか悪かったか、人さまざまであろうが、私は私の人生にとって良い経験だったと思っっている。終戦からの十年間には、昭和二十年八月・ポツダム宣言受託、十月・国際連合成立、十一

月・日本国憲法公布、二十四年五月・一ドル三百六十円の単一為替レート決定、二十五年六月・朝鮮動乱、十月・朝鮮戦争、二十六年九月・サンフランシスコ講和条約・日米安保保障条約調印など、政治、経済、社会、教育等各分野で民主主義の骨格ができたと思う。

しかし、最近特に民主主義、すなわち自由と責任という粹をはずれた、思いもよらないいろいろな事件が数多く発生するのはなぜなのか。私たちは二十一世紀をどれくらい生きられるか分からないが、もともと社会であってほしいと思う。私自身、古希の年まで生かされていることに感謝の気持ちでいっぱいである。

私の三十八度線突破記録

福岡原 梶山 緑

ある日私は、週に一回通っている病院の待合室で、順番がくるまでの時間つぶしに何気なくテーブルの上